

2018 - 10 - 02

# スポーツマネジメントが拓くスポーツの未来

清水 紀宏  
筑波大学 体育系教授

📧 [研究室 HP](#)へ / 📧 [研究室 Facebook](#)へ

## 1 東京五輪 1964 のレガシー

「もはや戦後ではない」(1956年経済白書)。この宣言から8年後の1964年、わが国で初めての第18回夏季近代オリンピック大会、そして世界で2回目のパラリンピック大会が東京で開催されました。日本人選手たちの活躍は、右肩上がりの高度経済成長期の象徴ともいえるカラーテレビを通じて放映され、東洋の魔女(女子バレーボールチーム)が金メダルを獲得した試合の瞬間視聴率は86.5%と驚異的な数字を記録しました。この大偉業と熱狂が、世界に類を見ないママさんバレーボールの普及につながっていくのです。

64年東京五輪が、その後の凄まじい経済成長を推進するロケットエンジンとなったことは間違いありません。今では、オリンピック招致運動の際には、立候補ファイルに五輪開催のレガシー(遺産)を明記することが常識となっていますが、64年五輪は経済発展の基盤となる莫大な社会資本(インフラ)をレガシーとして整備しました。例えば、新幹線、首都高速、東京モノレール等の交通インフラをはじめNHK放送センターの設立や衛星放送による海外へのカラー中継、ホテルオークラ、ホテルニューオータニなど国際級ホテルの開業、国立競技場、日本武道館、国立代々木競技場などの大規模スポーツ施設、そしてスポーツ振興法や体育の日、スポーツ少年団、体力・運動能力テスト等の諸制度もオリンピック大会を契機に創設されたものです。

当時の国民の生活は現在と比べれば決して豊かとはいえない状態でしたが、それでも三種の神器(白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫)、3C(カラーテレビ、クーラー、自動車)など、生活を一変させるイノベーションが次々と家庭内に揃えられ、日々の生活をみるみると便利・快適にしていきました。「鉄腕アトム」を見て育った子どもたちは、この国の右肩上がりの成長がいつまでも続く、そんな根拠のない希望を誰もが描いていました。もしかしたら、60年代のわが国は人類史上最も平穏で夢溢れる豊かな国と時代であったのかもしれない。

64年東京五輪は、わが国のこうした戦後復興と経済発展を全世界に誇示し、国民には夢と感動を与え、勇気を鼓舞する役割を果たしました。「スポーツが国と社会を変える!」、スポーツ(イベント)にはそんな大なる可能性があることを、国民とりわけ政治家たちと経済界に知らしめた機会でもあったのです。この偉大なる「ツールとしてのスポーツ」を活用して国威(プレゼンス)を発揚したり、企業や学校の宣伝をする



というような思惑がその後、大きな広がりを見せていきます。

## 2 64年東京五輪後のスポーツ

他方、64年五輪は、わが国のスポーツに大きな変革をもたらしました。明治期に外国から輸入された舶来文化スポーツは、わが国では長い間学校の「体育」として、専ら子どもたちの心と体を鍛え、育てる人間形成の教材として位置づいてきました。しかし、オリンピックで火が付いたスポーツへの関心は、その後矢継ぎ早にテレビ放送されるスポ根アニメ\*と相俟って本格的に燃え盛り、一大スポーツブームが巻き起こります。巨人の星(1965-1971)、タイガーマスク(1969-1971)、アタックナンバーワン(1969-1971)、あしたのジョー(1970-1971)など、サクセスストーリーを描いた作品群はいずれも当時の子どもたちを虜にし、彼・彼女らのスポーツ観や人生観の形成に絶大な影響力を發揮しました。また、漫画に夢中になった子どもたちがやがて成人し、スポーツ指導者となって次の世代に特定のスポーツ観を再生産させていきます。

この時期に培われたスポーツ観とは、根性・努力・忍耐・闘志などといった「精神主義」に彩られ、熱血的な指導の下で脇目も降らず血の滲む過激な特訓を乗り越えることを美德とする「鍛錬主義」、そして、苦難辛苦を根性で克服した先に掴み取る勝利に最高の価値を置く「勝利至上主義」を構成要素としていました。この三位一体の価値観がその後のわが国のスポーツ文化を特徴づけていきます。とりわけ、スポーツにおける競争の結果に重きを置く勝利至上主義は、「勝った者が正しい」「勝たなければ意味はない」「勝つためには手段を選ばない」など、およそオリンピックの思想(オリンピズム)とはかけ離れた考え方であることは間違いありません。しかし他方で、勝利を求めて全身全霊をささげるアスリートたちのひたむきさと清廉さは、政治的・経済的活動には非常に使い勝手のいい宣伝材料となりました。今やスポーツは、わが国の新たな成長をけん引する未来産業として期待される(スポーツの成長産業化)と同時に、国際社会の中でのわが国の存在感を示すメディアの役割(スポーツの国策化)をも担うようになってきています。

こうして、国と企業から手熱いサポートが提供され、勝つことを義務付けられたアスリートとコーチたちは、自らの社会的名声と将来の生活をもかけて、飽くなき勝利の追及へ駆り立てられていきます。現代のスポーツは、単にアスリート個人の戦いの範疇を大きく逸脱し、国と企業体の威信をかけた戦いへと変貌しています。このようなスポーツの文化的特性の変容は、今年になって日々報道されるスポーツ界における暴力・ハラスメント・ドーピングなどの様々な不祥事の根本的な原因ともなっているのです。

## 3 スポーツマネジメントの重要性

現代におけるスポーツは、「諸刃の剣」です。スポーツには、平和や共生といった人類史的課題の解決にさえ貢献しうる大きな可能性が期待される一方で、様々な病理的現象をも引き起こす危険性も秘めています。そもそも「勝ちたい」「征服したい」という欲望を原点とするスポーツは、人間の業であり、麻薬のようなものであることを自覚する必要があります。さらに、「勝ちたい」という欲望が「儲けたい」という営利資本や「力を示したい」という政治権力の欲望と融合した時、人間や社会を傷つけるだけでなく、スポーツという文化自体の持続可能性すら脅かしかねません。2020五輪を前に、スポーツへの社会的関心とその影響力が高まれば高まるほど、スポーツが誤った方向に暴走しないように正しく制御することが必要となります。このように、スポーツに潜む危険性の顕在化を未然に最小化し、スポーツの進むべき方向を人為的・意図的にコントロールすることがスポーツマネジメントの使命です。少なくともわが国のスポーツは、まだまだ絶え間ない点検と改善が必要な未成熟な文化です。2020を契機に、スポーツがわが国において健全かつ持続的

\* スポ根アニメ・漫画：根性と努力でスポーツでの勝利・成功を成し遂げていく人間ドラマを描いたアニメ作品

に発展していくためにも、スポーツそのものの発展を誘導するスポーツマネジメントの働きがますます大切になってくるに違いありません。

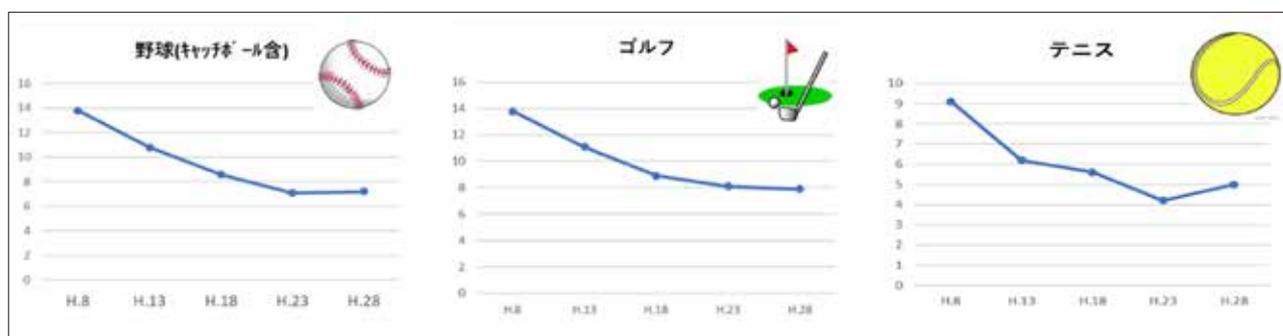
## 4 2020 東京五輪とポスト 2020 に向けて

わが国で2度目のオリンピック・パラリンピック大会に前回の64年東京五輪と同じような物質的なレガシーを期待することはできません。では、またとないこのチャンスに何を後世に残せばよいのでしょうか。それは、スポーツが健全な持続的発展を遂げ、人々の幸福な生活と心豊かな社会の形成に少しでも貢献する基盤をつくるということです。そのためには、次の2つのことがスポーツマネジメントを考えるにあたって特に大切だと考えられます。

### 4.1 スポーツの持続的発展とダイバーシティの推進

なぜか日本人は、世界の中でも「オリンピック好き」な国民のようです。オリンピック開催期間中は、睡眠不足になる人も少なくありません。他方で、スポーツを愛好する人たちは、減少してきています。もちろん、ウォーキングやエクササイズなど健康のための身体運動（エクササイズ）をする人たちはたくさんいるのですが、野球やゴルフ、テニスや水泳など、楽しさを求めて行われるテレビで人気のスポーツは、ほぼすべての種目で「する人」の数が減ってきています。どうやら、オリンピック種目に代表されるスポーツは、誰もが「する」ものではなく、専ら「観る」ものになってきているようなのです。「見世物」としてのスポーツに明るい未来はありません。だから、スポーツ基本法（2011）の精神でもある、「権利としてのスポーツ」を実現することが、最も大きな課題です。そして、この課題を解決するためのキーワード、それは「多様性：ダイバーシティ」です。

2020 東京五輪は、スポーツの新しい可能性を誰もが共有し、世界に発信する好機となることが期待されています。これから切り拓かれるスポーツの可能性は多様に広がっていますが、中でもスポーツと人類社会の持続的発展にとって最も緊要かつ最も困難な課題が「スポーツを通じた共生社会の実現」です。東京オリンピック・パラリンピックのビジョン\*\* 骨子「TOKYO2020 がめざすもの」（2014.10.10 公表）では、「多様性と調和」を基本コンセプトに据え、「あらゆる多様性を肯定し真の共生社会を実現しましょう」と謳われました。共生社会は、ポスト 2020 のオリンピック・レガシーの1つに掲げられたのです。確かに近年、ダイバーシティや共生という用語は、スポーツの分野でも多用されるようになり、また、スポーツ政策においても女性や障害者の参加が重視されてきています。しかしながら、スポーツという文化の現実をみると、これまで優勝劣敗の競争原理に支配されてきたために、多様性や異質性に対する配慮に欠けがちであり、どちらかといえば先に述べたような1つの価値観に同化させるようとするパワーが強く働いてきたように思われます。



スポーツ人口の減少（総務庁「社会生活基本調査より」）

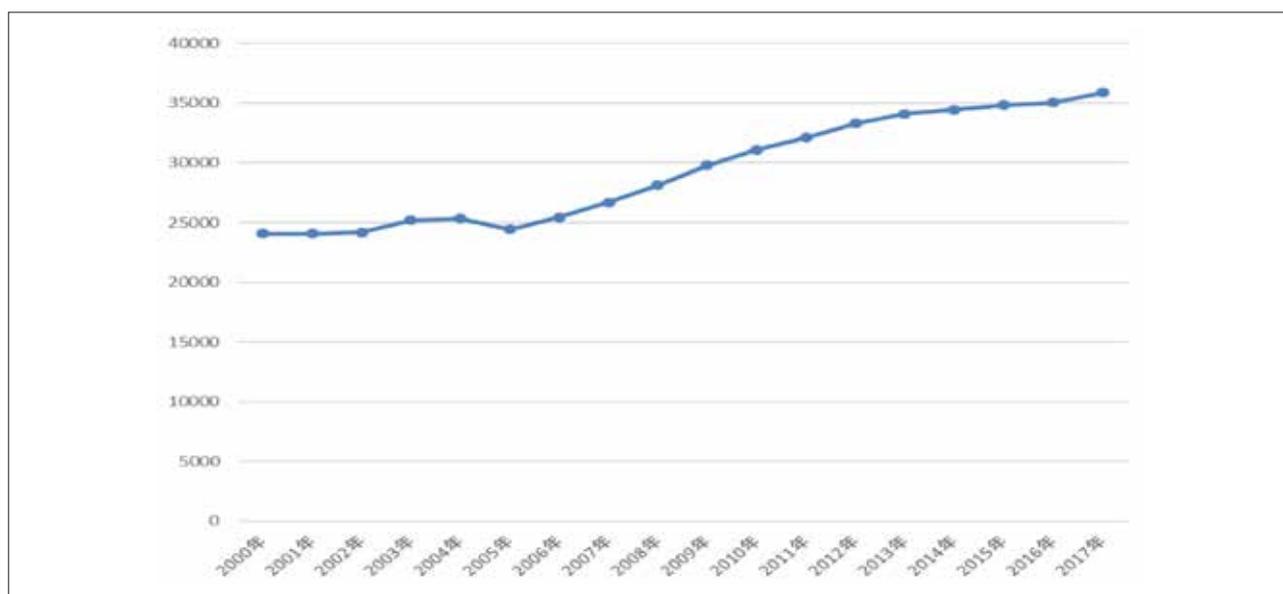
\*\* 東京 2020 組織委員会 大会ビジョン : <https://tokyo2020.org/jp/games/vision/>

そしてこのことが、多くの人たちをスポーツから遠ざけてきた主要な原因であり、パワハラや暴力に代表されるスポーツの負の側面をも創り出してきました。2020 以降のスポーツ改革の第一歩は、性別・年齢・人種・民族・価値観・能力・社会階層・障害の有無などの違いによって差別・排除されることがないスポーツの世界を築いていくことです。特に、スポーツは競争により勝ち負けを決することを楽しむものだからこそ、勝者・強者が上から力で支配し、敗者や弱者を排除したり、不当・不正な扱いをされるようなことのない文化に成熟させていくこと、それこそがスポーツの持続的発展にとって最重要戦略となるのではないかと思います。

## 4.2 スポーツを科学する若者たちへ

最後になりますが、2020 以降のスポーツの担い手となる若い方々に呼びかけたいと思います。これまでスポーツは、多くの人々にとって、競技（プレイ）したり、みる（観戦・視聴）ものであっても、知的探求の対象ではなかったように思います。その大きな原因は、学校で教えられる「体育」の授業がスポーツを「する」ことに偏っていたためでしょう。しかし、21 世紀のスポーツは「する」「みる」だけでなく、「知る」という面白さを提供してくれる文化としなければなりません。実は、21 世紀に入った頃から、スポーツを専門的に学ぶ大学・学部・学科が増え続けています。今では、約 15 万人の学生が大学でスポーツを学び・研究しています。また、周知のように、オリンピックを頂点とするスポーツ競技の世界では、世界最先端の科学的知見が開発・応用されています。つまりスポーツは科学的な知的探究にとってとても魅力的な対象となりつつあるのです。

ところで、「スポーツ科学」というと、高性能の実験器具を用いて動作や身体機能を測定・分析するよう



スポーツ人口の減少（総務庁「社会生活基本調査より」）

な研究シーンを思い浮かべるとと思いますが、スポーツ科学の範囲はそればかりではありません。例えば、オリンピックを研究の対象とした場合だけでも、メダルはなぜ金銀銅の3つなのか、なぜ4年に一度だけなのか、なぜ誕生の聖地アテネ（ギリシャ）ではなく世界の都市をオリンピック大会はめぐるのか、なぜ古代オリンピックは終わってしまったのか、なぜオリンピックをアスリートたちは目指すのか、オリンピックを成功させるための運営方法は、オリンピックはスポーツの発展とどのように関わっているのか、などなどおそらく無限に近いほどの問いが浮かんできますし、その多くの問いはまだ解明されていないことばかりなのです。

あまり知られていないことですが、1964年の東京五輪の年、世界で初めて世界のスポーツ科学者たちがわが国に集結し、国際的なスポーツ科学会議が開催されました。そして、2020年には再びわが国で国際体育健

康スポーツ科学会議が開催されることになっています。この会議では、約 2500 名の内外の研究者が横浜に集い、5 日間にわたって実に多様なテーマについて研究成果に基づく議論を交わす予定です。これも東京五輪が創り出した副産物の一つです。是非とも、スポーツの科学的探究に多くの若者が参加され、正しいスポーツのかじ取りができる専門家が育つことを願うばかりです。

スポーツへの見方(まなざし)が変わる。そんな、2020 五輪の力に期待しましょう。

---

## Profile



清水 紀宏 SHIMIZU Norihiro (筑波大学 体育系 教授)

1961 年静岡県生まれ／専門はスポーツ経営学／[一般社団法人日本体育学会](#)常務理事、[日本スポーツ体育健康科学学術連合](#)運営委員長、[日本体育・スポーツ経営学会](#)常務理事／著書：『[テキスト 体育・スポーツ経営学](#)』大修館書店（編著）、『[よくわかるスポーツマネジメント](#)』ミネルヴァ書房（編著）／論文：[オリンピックと格差・不平等](#)、[体育・スポーツ経営学研究](#)第 30 巻、ほか。